

## 彫刻の調査と研究経過

### 一 俊乗房重源の研究

鎌倉時代における東大寺の復興造営において、その初代の勧進上人になつて活躍した俊乗房重源が、文化史の上に残した業績にはきわめて著しいものがあつたが、これ等を総合的に調査し、また研究したものはほとんどなかつたといつてよい。

そこで当研究室では幸に重源がその事蹟を自身で書き記して置いてくれた「南無阿弥陀仏作善集」(原本複製―奈良国立文化財研究所史料第一冊、昭和三十年三月三十日発行)の記載に拠つて、そこに記されている各社寺を厳密に探索し、またそれ等各社寺に残されている重源関係遺品を調査して、重源の業績をより一層明らかにしようとして企図している。そのためにこれまでも、東大寺(奈良市)をはじめとして、醍醐寺(京都市)、高野新別所(和歌山県)、播磨浄土寺(兵庫県)、備中別所(岡山県)、阿弥陀寺(山口県)、新大仏寺(三重県)、備前浄土寺(岡山県)、笠置寺(京都府)、胡宮神社(滋賀県)等の重源関係諸社寺の主要なものを調査して廻つたのであるが、なお小さな社寺とか、また現在廢滅に歸したようなところとかには、まだじゅうぶん調査し切れないところがある。例えば、渡辺別所(大阪市)、遠石小

松原末武三八幡宮(山口県)、讃岐善通寺(香川県)、相模笠屋若宮(神奈川県)、昆陽寺(兵庫県)等の如くである。これ等も漸次調査研究して行くつもりである。

### 二 唐招提寺の総合的研究

唐招提寺の宝物調査は、昭和二十九年度に一応その基礎調査だけを終つたのであるが、その時の彫刻の調査対象は百十六点であつた。したがつてその一つ一つの作例の精密な調査なり研究なりはまだ漸く緒についたばかりである。例えば本寺における木心乾漆像の問題とか、奈良平安兩時代のうつりかわりの問題とか、鎌倉復興期における作例の問題とかには、まだまだわからないところがたくさんある。

### 三 西大寺叡尊の研究

西大寺叡尊の研究は、昭和三十年度に西大寺における基礎資料を一応調査して、その生の資料だけを「西大寺叡尊伝記集成」(奈良国立文化財研究所史料第二冊)として昭和三十一年三月二十五日に出版したが、これはまったく当研究の序の口といつてよい。なお叡尊の研究

には、本拠の西大寺のほか、奈良県下だけでも法華寺、海竜王寺、不退寺、般若寺、白毫寺、大蔵寺、大神神社、その他に観尊に關係深いものがあり、また大阪府下でも道明寺、西琳寺、教興寺等があり、京都府下でも橋寺放生院、浄住寺等がある。これ等にはおそらく観尊關係の資料がいくつに残されている筈で、それ等をたんに尋ね廻ることによつて、鎌倉文化史に大きな足跡を残した観尊のことが、なお一層明らかにされることと思われる。

#### 四 藤原彫刻の研究

わが国の彫刻史の中で、その作例もかなりたくさんありながら案外に整理されていないのが藤原彫刻である。そこで当研究室ではとくに和様彫刻の形成とその伝播という二点にしばつて、藤原彫刻の基礎研究をはじめたわけである。その中で和様の形成については、広隆寺講堂の阿弥陀如来像、仁和寺金堂の阿弥陀三尊像、醍醐寺薬師堂の薬師三尊像、六波羅蜜寺本堂の十一面観音像及薬師如来像、善水寺本堂の薬師如来像及両脇侍像、興福寺の薬師如来像等の一応の調査を終えた。

また和様とくに定朝様の伝播については、六波羅蜜寺本堂の地藏菩薩像、法界寺阿弥陀堂の本尊像、浄瑠璃寺本堂の九体阿弥陀像、安樂寿院の阿弥陀如来像、円成寺本堂の阿弥陀如来像、長岳寺の阿弥陀三尊像等を調べ、それ等の写真を撮つた。しかしこの研究は研究対象となる作例の数が多いだけに、かなりの歳月を要することと思ふ。

#### 五 能楽発達期（室町—江戸初期） における能狂言面の研究

能狂言面の研究では、とかく室町時代のものがないがしろにされていた傾向があつた。それはこれまでにあまり室町時代の明らかな作例が知られていなかったからである。ところが昭和二十八年頃から奈良の山間にあるいくつかの神社から室町時代の明徴ある能狂言面がつぎつぎと発見されて、その数量もかなりの数に上ることになったので、その本格的な研究をはじめたわけである。その研究対象は次の通りである。

柳生丹生神社（九面）	吉野勝手神社（十面）
多武峯談山神社（一面）	柳生八坂神社（五面）
宇陀海神社（八面）	水間八幡神社（九面）
奈良豆比古神社（十九面）	柳生長尾神社（四面）
吉野天川社（三十一面）	伊勢和屋村（七面）

（小林 剛）